

死をどのように考えてきたのか③

再死への不安

インドでは最も権威のある最古の聖典として知られる『リグ・ヴェーダ』には、「ヤマ」に捧げられた讃歌 (10:14) があります。ヤマは、死者のための道を最初に発見した者 (10:14:1) で、そこには去った祖先が居て、その子孫はそこへと赴きます (10:14:2)。ヤマの国では、ヤマや祖霊たちと共に、捧げられた供物や讃歌などを楽しむことができることになっています (10:14:8~10)。

祖先と合同せよ、マヤと〔合同せよ〕、祭祀・善行の〔果報〕と〔合体せよ〕、最高天 (ヤマの居所) において、欠陥を棄てて、〔汝の〕家郷 (死者の世界) に帰れ。光輝に満ちて、〔新たなる〕身体と合体せよ。

去れ、散り去れ、ここより這い去れ (悪魔に向かつての言葉)。この者 (死者) のため、祖先はこの居所を設けたり。ヤマは、昼・水・夜もて飾れる安息所を彼に与う。

…しかしてよく賜物を頒つ祖先に近づけ、ヤマと共なる饗宴を楽しむところの。(辻直四郎訳『リグ・ヴェーダ讃歌』岩波文庫、昭和45年、230~231頁)

しかし、人々はヤマの楽土に居続けることができないのではないかという不安に苛まれることになりました。再び死ぬのではないかという不安の芽生えです。そこで、「再死」を克服する方法が考えられることになりました。

他方では、個体における不死の探求が始まり、アートマン (個体/個人の本質) が考察の中心を占めるようになっていきました。水の表象に結び付いていた素朴な「輪廻」説は、不死のアートマンという思想と結びついていきます。人間が死ぬと、その肉体は自然現象のなかに解消していきますが、不死なるアートマンはそこから抜け出て、あたかも草の葉の先端に達した青虫が次の葉に移っていくように、次の肉体へと移っていく (『ブリハッド・アーラヌヤカ・ウパニシャッド』4:4:2) と説かれています。

さらに、この輪廻の説に密接に結びつくのが「業 (行為)」の思想です。人間は自ら行った行為の善悪に応じて、その果報を受けるというものです (いわゆる「善業善果、悪業悪果」)。これがアートマンの論と結びつくと、アートマンは、人の行為にしたがってそれに応じたものになると理解されます。善い行いをする人は善人に、悪い行いをする人は悪人になるというわけです。そして、アートマンが身体から出ていくとき、その後「業」が従っているとされました。

このように、輪廻の説は「死」をどのように捉えるかということから生まれたといえるでしょう。誰も避けることのできない「死」は「生」を考えるために必要不可欠なのです。

(ヤマについて辻氏は以下のように解説している。「ヴィヴァスヴァット (太陽の子) とされるヤマの起源は古く、アヴェスター聖典のイマ (最初の人間で、理想的統治者) に相応する。しかしリグ・ヴェーダにおいては、最初に死の道を発見した点が強調され、ヤマは死界の王者として、最高天にある楽園に君臨する。当時の来世観によれば、地上で長寿を保ったのち、ヤマの世界に到達す、祖霊 (ピトリ、祖先) と共に享樂することを理想とした。後世来世観の変化に伴い、その領土は地下に移り、ヤ

マはもつばら死の神・悪業の懲罰者となり、仏教においては閻魔天として知られる」(辻、前掲書、229頁)。アヴェスター聖典 (Avestā) は、ゾロアスター教の根本教典のこと。)

“不死を得るための門は開かれた”

輪廻の説や業の思想、そしてこれら二つの結びつきには、再死への不安がありました。そのような不安が不死を希求させた一因であったともいえます。

ブッダが生きた時代、輪廻の思想は広くインドの人々に受け入れられていました。深い自省によって、自らも「老」「病」「死」から逃れられない者であることを自覚したブッダは出家し、さとりを得ることになりました。原始仏典の中には、そのさとりを他の者にも伝えてほしいと要請するブラフマー神 (梵天) との対話が記されています。ブッダは、貪欲と憎悪とにうち負かされた人々にとって、ブッダがさとりに得たその法をさとるのは容易ではなく、また、見る事ができないと答えます。それに対してブラフマー神は、世にはその眼がまだあまり塵に汚れていない人もいますから、法を説くように懇請します。「いまあなたは不死を得るための門をお開きください。心浄き人によってさとられた法をお聞かせください」と。ブッダは世界を観察し、そして衆生のなかには、知恵の眼が煩惱の塵で汚れていない者もあり、ひどく汚れている者もあり、資質の劣った者もある、ということが知られ、ついに「不死を得るための門は開かれた。耳をもつ者は、聞いておのれの盲信を捨てよ」(『相応部』6:1:1:1~13、長尾雅人責任編集『バラモン教典、原始仏典』世界の名著1、中央公論社、昭和54年、431~434頁) と言います。そして、ブッダは四諦 (4つの真理) 八正道 (8つの正しい道) を説きました。

尊い真実としての苦 (苦諦) とは、人生のすべてのもの、それがそのまま苦であること。尊い真実としての苦の生起の原因 (集諦) とは迷いの生涯を繰返すもとなるもので、それは渴欲であること。尊い真実としての苦の消滅 (滅諦) とは渴欲からすっかり離れ、それを止滅し棄て去ること。そして尊い真実としての苦の消滅に進む道 (道諦) とは8つの正しい道であること。そのようにして、これら4つの真実はこれである、これら4つの真実は知り尽くされなければならない、これら4つの真実は知り尽くされたという合計12の形をもって観察し、浄らかにそれらの真実をありのままに知見したことによって、「見る眼が生じ、理解が生じ、洞察が生じ、覚知が生じ、直観が生じ」、あらゆるものの中で最高の正しいさとりをさとったと自認したブッダは、そのことをかつて一緒に出家修行をした5人に告げました。「わたしの心の解脱は不動である。これが最後の生存であって、いまや再び迷いの生存にはいることはない」(『相応部』56:11:1~14、同上、433~438頁)。

「およそ生起する性質のあるすべてのものは、滅びゆく性質がある」(『相応部』56:11:15、同上、438頁)

こうして、苦の本質を知り尽くすことによって、存在の真実が無常 (恒常であるものはない、絶対なるものはない) であることを知ると、迷いの生存から解放されて不死の者となることが語られたのです。